

NPO

水平線に見えた津波の壁…。 何もなくなった町で、皆のやる気を掘り起こす。

石巻市

太田 美智子 東日本大震災圏域創生 NPO センター

取材日

2011.9.9

宮城県地球温暖化防止活動推進員として講師活動や環境活動に取り組む。自宅が津波で流され、石巻高校トレーニング室で生活しながら東日本大震災圏域創生NPOセンターを立ち上げた。雇用創出、避難所での問題解決、被災者が自立して生活できるまでの支援サポート、子ども達のサポートなどあらゆる復旧・復興に関するサポートを行っている。

3月11日 14時46分

3月11日は、宮城県地球温暖化防止活動推進ネットワーク(Net PAGW)の総会の打ち合わせを行っていた。車で渡波市民市場の駐車場を出た直後地震に襲われた。助手席からすべり落ちそうなほどの揺れだった。車を止めドアをすべて開けた。道路脇に置いてあった水槽の水は波打ってこぼれ落ち、ほとんど空になった。反対側の民家から人が飛び出し、電線が波打つ状態を目にして、揺れが収まるのを待つしかなかった。今まで体験したことのない初めての揺れだった。すぐさまこの場所からどのように避難すれば良いかを考えた。石巻では日和山に逃げなければ救われる場所はないと思い、とにかく日和山に逃げようとした。逃げるためには、北上川河口の日和大橋を渡るしかない。そこを目指した。その時点では車はあまり走っていなかったが、日和大橋のたもとで混み始めてきた。その時、先頭の車を追い抜いて行く車があり、この先へ行けるのだという希望と早く渡らなければという焦燥に駆られ、橋を渡りきれぬかどうかは分からなかったが、賭けてみた。滑り込みでも良いから対岸へ着きたいとその車に続いた。車で走っている間、私は助手席から太平洋を見ていた。水平線が帯状に太く黒い。普段の光景とは違っていた。低音でズーンと来るような空気を感じた。何かが起こる、今までにない凄い事態になると直感した。あとで過去にチリ地震津波を経験している人から聞き、この時に見た黒い水平線は何mという高さで襲ってきた津波の壁であったということが分かった。そんな中、無事橋を渡りきった。

総合体育館へ

壊滅的な被害を受けた南浜町に83歳の叔母が1人で住んでいる。叔母の家は日和山までの避難経路上にあった。叔母には常日頃から地震の時は直ぐ逃げるように言っていたことが功を奏し、行ってみると叔母はリュックを背負い玄関の鍵をかけ



ようとしているところだった。少しでもタイミングがずれていたら行き違いになっていたかもしれない。そのまま叔母を車に乗せ、大手町の坂を上り総合体育館へ着いた。駐車場もたまたま1台分だけが空いていた。事態を把握するためそこに留まった。

津波を逃れ、あらゆる方向から総合体育館を目指して多くの方が避難して来ていた。しかし総合体育館は、その日プロレスの会場となっており、室内は地震で照明が落下したため館内には入れず、ロビーしか居場所はなかった。波を被って濡れたままの人を中心に、ストーブ2台をみんなで囲むように暖を取っていた。私たちは車の中で過ごすことにした。そのうちに雪が降り出し寒くなってきたので、積んでいた新聞紙を車の窓ガラス全面に張り、衣服の中に巻いて体温低下に対処した。避難したことを近い2人にメールで伝えることはできたが、つながったのはほんの一瞬だけで、やがてメールもつながらなくなった。ガソリンも残り少なかったのでヒーターを点けては消しを繰り返し、その夜をしのいだ。南側の空がオレンジ色に染まり、火事が起きたことは分かったが、それがどこでどのように起きているのか情報を得る手段は全くなかった。

総合体育館では、私たちの団体が数日前にフォーラムを開催した時に配ったお茶のペットボトルが

1.5ケース残っていたので、それを体育館管理者と車内に避難していた周りの人たちに届けた。すると隣の車から「今、リンゴの差し入れがあったから」とリンゴを分けてもらえた。叔母もリュックに詰めた飴やお菓子をみんなへ分け、そうして持っていた食品を皆で分け合って空腹をしのいだ。降雪で凍えるようだったがこのことで心はほんわかしっていた。水はいつ届くか分からなかったので、ペットボトルのお茶はこんなに少しずつ大切に飲んだことはないというくらい大事に大事に飲んだ。

翌日、総合体育館が遺体安置所になるため退去指示が出された。被災全貌を確認するため、3人で市内を一望できる日和山へ向かった。チロチロ赤い火がのぞきくすぶり続ける灰煙の隙間から、何もかも無くなった石巻の町が目飛び込んできた。いったい何が起きたんだろう、これからどうなるんだろう。しばらく呆然と立ち尽くした。

何か所か避難所を探して転々とし、現在の石巻高校トレーニング室へ落ち着き、今もここで生活している。避難所に身を置いた直後に、自宅がどうなったか確認しようと下へ降りようとしたが、流された車が折り重なっていたり、まだ水が引いていない状況だったので断念した。数日後に再び試みた。瓦礫や塀をつたい、泥だらけになりながら辿り着いた我が家は一階部分のほとんどが津波にやられていた。居間や床の間の床板が持ち上げられ家具類は濁流にもまれたようにあちこちに散逸、キッチンでは、裏口は流入物に破壊され、固定していた食器棚や冷蔵庫が不自然に傾き、泥にまみれた家財道具で足の置場すらなかった。大切な物を置いていた寝室は、机・ベッド・テレビなどすべてが汚泥にまみれていた。もちろん大事な資料のほとんどは水没し激しく汚臭を放っていた。避難所では、乾電池の残量が心配でラジオも細切れにしか聞くことができず、全体の情報を把握することが困難だった。3、4日してラジオ石巻が、誰がどこにいて誰を捜していますといった安否確認の情報を流すようになった。また入口に貼りだされた、手書きの「日日新聞」でようやく全体像がつかめるようになった。情報は次第に増えていったが、地域の詳細まではわからない。渡波のグループホームにいた母親がどうなっているのか知れたかったが、情報が無く警察へ捜索願を出した。

この避難所にもどこにいるのか分からない家族を必死に探しに来る家族がひきもきらず、泥だらけの靴も脱ぎきれないまま、入り口で家族の名前を叫ぶ。私たち自身、ここに誰がいるのかも分からない。そこで、私達のいる入り口付近に避難所にいる人の名簿を作って置くことにした。名簿に見つからない場合でも、周りの人に声かけを行うよう促した。

ネットワークの立ち上げ

市から回ってくる支援物資は限られていて、量が少ないので全員に十分には行き渡らない。メールで支援を呼びかけた。Net PAGW（宮城県地球温暖化防止活動推進ネットワーク）のメンバーの関係で四国の認定NPO法人セカンドハンドという団体とつながり、大量の物資を手配してくれた。しかし物流機能も断たれ、ガソリンも不足していて配送は困難を極めた。当初は170名ほどが避難所にいた。約4分の1が幼稚園児で、幼稚園に残っていたお菓子を分け合って食べた。豆腐1丁を10人で分け、小さなおせんべいも4等分にし、そのおせんべいで「かんぱーい!」と大きな声で乾杯しながら、すべてのものを分け合って食べていた。やがてリーダーが替わっていき、Net PAGWメンバー高橋さんのリーダー就任を機に、「自分もみんなと一緒に立ち上がりたい」という気持ちでサポートに入った。

届く支援物資は数や形が異なっていて、全員に公平に分配するのに苦労した。子どもたちの割合が多かったこともあり、この避難所は子どもを中心に運営していく形をとった。3月18日に「子ども避難所クラブ」を試験的に立ち上げ、避難物資が入っていた段ボールの裏側を使ってクレヨンで絵を描いてもらった。ボランティアで入っていた画塾の先生と方向性をすり合わせ、ここを出発点として他の避難所でもチャイルドタイムの子育て支援を提案した。

キャッシュネットワークということでの雇用創出、避難所での問題解決、被災者が自立して生活できるまでの支援サポート、子ども達のサポートなどあらゆる復旧・復興に関するサポートを行っていきこうと、4月17日に「東日本大震災圏域創生NPOセンター」を立ち上げた。2-3年の話ではなく、10年~20年を見据えての活動を想定している。

避難所での環境教育

避難所では毎朝6時に朝礼を行っている。朝礼や会話の時に、震災直後は電気も水も通っていなかったもので、どのようにしたら清潔にかつ不安なく生活できるのか、節水の生活の知恵を提案した。石油ストーブの燃料も貴重だったこともあり、石油はあと40年で枯渇してしまうこと。ソーラー式のLEDライト提供を機に、新しいエネルギー利用についてもお話しした。生活を共有する中で、ただ使うのではなく、それが何なのかを説明することが、結果的に環境教育につながっていた。避難所から仮設住宅へと生活の場が変化し、エネルギー利用を抑えたいと考えた時、暮らしのエコ

の知恵を伝えるなどこれまで環境に携わっていた者として活躍できる場面が増えてくるのではないかと思う。

これから

これまでの活動で知り合った団体の協力があってやっと事務所が決まった。雇用創出の支援金をいただきながら活動していくが、まだ法人化していないため県や国からの助成はもらえない状況にある。そこを繋いでくれているのは、友人・家族・親類のみならず、やはりボランティアで支援してくださった団体や企業だ。義援金として支援した

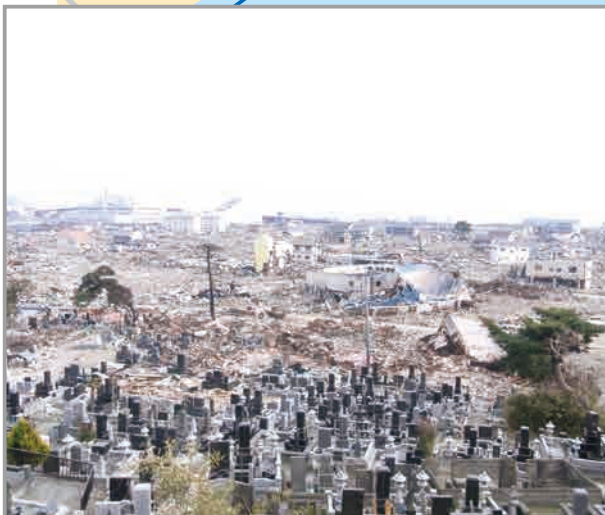
お金が見える形できちんと使われるところに寄付したいと思う人が多いようで、そういった人たちに支えられながら運営している。

これからの街を作っていくのは若い世代の人たちだ。その人たちに起業できるようなノウハウを雇用創出の事業の中から学び取ってもらえるようサポートしていきたい。

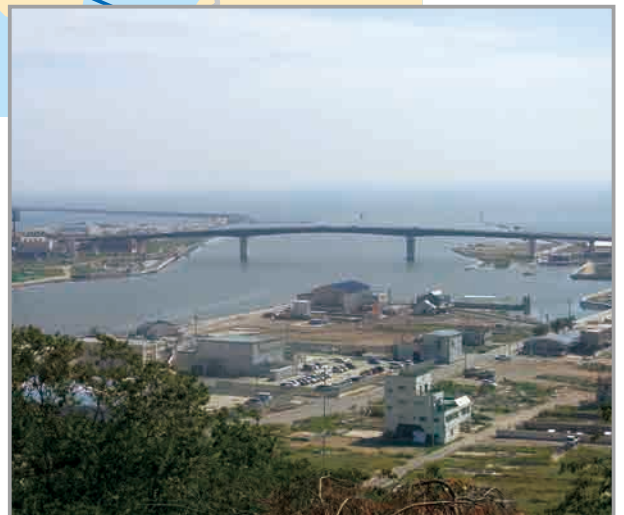
環境に携わっている時もそうだったが、震災からの復興も次世代に何を手渡すかということが大切だと思う。それはNet PAGWを作ろうとした皆の思いであり、皆がその気になれる活動の場づくりをしながら、そこで得たことを活かした新しい街づくりをしてほしいと思う。



門脇小学校



日和山から見た門脇地区



日和大橋